

昔むかし、ロンドン橋の上に端から端まで店が並び、橋の下を鮭が泳いでいたころ。ノーフォーク州のスウオハムに、ひとりの貧しい行商人が住んでいました。荷物をつぎ、犬を連れて、村から村へと歩いては、わずかな品物売っていました。暮しをたてるのが精いっぱい、一日の終わりに、安らかに眠ることさえできれば、男は、それで満足でした。

ある晩のこと、男は夢を見ました。夢の中にロンドン橋が現れて、そこへ行けばいい知らせを聞くことができるという声を聞きました。男は、夢なんか信じるたちではありませんでしたが、つぎの晩も、そのつぎの晩も、同じ夢を見ました。そこで、男は、「これはひとつ、試してみなくてはならんな」と思いました。

男は、ロンドン橋に向かって歩きだしました。

ずいぶん長い旅をして、ようやくロンドン橋の上に立ちました。男は、右や左のりっぱな家をながめたり、下を川が流れていくのや、船が通っていくのを見ると、なんだかうれしくなりました。男は、一日じゅう、橋の上を行ったり来たりしましたが、いいことは何も聞けませんでした。

つぎの日も、ロンドン橋の上に立ってながめたり、端から端まで行ったり来たりしましたが、やっぱりいいことは何も聞けませんでした。

三日目になって、また、男が橋の上に立っていると、そばの店の主人が話しかけてきました。

「あんた、どうして、そんな所で何もしないでつつ立ってるんだい。何か売り物はないのかね」

「ええ、売り物はないんです」

「でも、物乞いをしてるわけでもなさそうだね」

「ええ、自分でかせげるあいだはね」

「じゃあ、いったい、ここで何をしているんだね」

「それがですね、じつは、夢を見たんですよ。ここに来るといい知らせが聞けるって」店の主人は、お腹をかかえて笑いました。

「おやおや、そんな馬鹿げたことでこんな所で立ってるなんて、あんたもまぬけだね。じつはね、わしも夢を見たんだよ。夢の中で、わしは、スウオハムって所にいたんだ。たしかノーフォーク州にあったと思うんだが、わしは行ったこともない。夢では、わしは、行商人の家の裏庭にいたんだ。そこに大きなかしの木があつてな、その根元を掘ると、宝がどっさり出てきたのさ。でも、そんな馬鹿げた夢を信じてはるばる旅をするほど、わしはまぬけじゃない。さあ、あんたも家に帰って、商売に精を出しな」

さあ、男は、それを聞くと、大急ぎで店の主人に別れを告げて、帰っていききました。そして、家に着くと、さっそくかしの木の根元を掘りました。すると、宝がどっさり出てきました。男は大金持ちになりました。

さて、男は、富を鼻にかけて大切なことを忘れるような人間ではありませんでした。掘り出した宝で、スウオハムの教会堂をたてなおしたのです。

男が亡くなると、村の人たちは、教会堂の中に男の石像をたてました。荷物をかついで犬を連れたその姿は、いまでも、そこにあります。

村上郁再話

資料：『More English Fairy Tales』JOSEPH JACOBS